

玉鬘の「赤裳」が内包するもの——『万葉集』における「赤裳」とのイメージ的共通という視点から——

森田 直美

はじめに

本稿が対象とするのは、『源氏物語』真木柱巻における以下の場面である。

内裏にも、ほのかに御覽せし御容貌ありさまを心にかけたまひて、「赤裳垂れ引きいにし姿を」と、憎げなる古言なれど、御言ぐさになりてなむながめさせたまひける。

これは、当初未婚のまま尚侍就任を予定されていたにもかかわらず、突如奪われるように髭黒大将の妻となった玉鬘が、初参内を果たした後の場面である。対面も束の間、慌しく髭黒邸へ連れ戻されてしまった玉鬘の美しさが忘れられず、冷泉帝は物思いに更けつてゐる。そして玉鬘への慕情を、『古今和歌六帖』三三三三番歌「立ちて思ひ居てもぞ思ふ紅の赤裳垂れ引きいにし姿を」に事寄せる（注①）。

ここで、「憎げなる古言なれど」と殊更に断りながら「赤裳」の歌を引く理由については、既に幾つかの考察が試みられてきた。例えば齋藤由紀子氏は（注②）、『日本霊異記』上巻所収の

「狐を妻として子を生ましめし縁」との関連を指摘されている。この話は、人間に化けた狐が男の妻となり、やがて正体が発覚して去ってゆくというものである。その中で「赤裳」は、狐が美女に化けた際、その尾が変じたものとして描かれている。

玉鬘の母である夕顔の造型に、唐代伝奇「任氏伝」をはじめとした日中妖狐譚の影響があることについては、新聞一美氏による詳論があり（注③）、現在ほぼ定説化している。齋藤氏はこれを受けて、玉鬘に関連して「赤裳」の引歌が用いられるのは、母の面影に通じる「狐」の姿を投影したものと捉えられた（注④）。また藪葉子氏は（注⑤）、『古今六帖』で当該歌の次（三三三四番）に配列されている「山吹のにはへるいもがはねず色の赤裳の姿夢に見えつつ」にまで視野を広げて考察され、これは、野分巻において山吹の花に喩えられた玉鬘の属性を喚起する引歌だと論じられた。

いずれの説も、当該場面における「赤裳」歌の引用の意義を考える上で非常に示唆的であり、首肯できる。本稿では、これ

らの先行研究を踏まえて更に、当歌の原典である『万葉集』の「赤裳」との関わりを、そのイメージの共通性という視点から考察していきたい。

もとより、『源氏物語』の『万葉集』摂取は、諸説紛々として定まらない。また、当該歌の引用は『古今六帖』に寄るもので、『万葉集』における「赤裳」歌の位相と真木柱巻引歌の意義とを直接的に結び付ける考え方には、大方の反論も予測される。しかし、『万葉集』の「赤裳」表現を見渡すにつけ、当該歌が、この場に引くべき唯一無二の性質を有する可能性が窺えたのである。そこで、真木柱巻の引歌が、『万葉集』に散見する「赤裳」と同種のイメージを共有しているという緩やかな関連性を指摘することで、この歌が引かれる必然性を試論する。

『万葉集』の「赤裳」

『万葉集』には、真木柱巻の引歌を含めて、十首の「赤裳」用例がある。更に「紅」や「はねず色」といった赤系統の色彩語で形容する「裳」の例を含めると、全十二首を数える。その十二首を見てまず気付くのは、作者判明歌が九首と、その割合が非常に高いことである。そしてその作者たちは、人麻呂・赤人・憶良・旅人・家持・池主と、集中著名な男性歌人ばかりで

ある。また、「赤裳」を詠う際の状況や表現のあり方、「赤裳」というものに対するイメージにも幾つかの共通点が認められる。以下この十二首を概観し、「赤裳」の詠まれる状況や、それが象徴するものについて考察する。

I. 人麻呂・赤人の「赤裳」

『万葉集』における、人麻呂の「赤裳」詠は以下の三首である。

（ア）住吉の出見の浜の柴な刈りそね娘子らが赤裳の裾の濡れて行かむ見む （巻七 一二七四）

（イ）我妹子が赤裳ひづちて植ゑし田を刈りて収めむ倉無の浜 （巻九 一七一〇）

（ウ）安胡の浦に舟乗りすらむ娘子らが赤裳の裾に潮満つらむか （巻十五 三六一〇）

この三首の内、（ア）は人麻呂歌集出歌、（イ）は、その後の一七二一番歌と合わせて左注に「右二首或云柿本朝臣人麻呂作」とある。（ウ）は天平八（七三六）年に新羅に派遣された使者の贈答歌とされているが、これが持統六（六九二）年の伊勢行幸の際、都に残った人麻呂が詠んだ、

あみの浦に船乗りすらむ娘子らが玉裳の裾に潮満つらむか （巻一四〇）

の異文であることはよく知られている（注⑥）。

三首の内容を見てゆくと、（ア）には、芝に隠れた男性たちが、遠方の浜辺に行く女性を眺めている様子が詠まれる。（イ）は、第四句までは、結句の「倉無の浜」を引き出すための序詞的な働きをする箇所ではあるが、「田（農作）」を詠もうとする時に、その映像として浮かぶのが、立ち働く女性の「赤裳」である点には目を留めておきたい。そして（ウ）は、行幸に従う女官たちの姿を詠んだものである。行幸に参加していない人麻呂は遠い都の地で、その行幸を詠んでいる。つまり、行幸の映像として象徴的に想起されるのが、女官の「赤裳」だったのである。

行幸において海辺を行き来する女官の「赤裳」を詠んだものとしては、次のような例もある。

（エ）黒牛潟潮千の浦を紅の玉裳裾引き行くは誰が妻

（巻九 一六七二）

作者未詳ではあるが、「大宝元（七〇一）年辛丑の冬十月に、太上天皇（持統）大行天皇（文武）、紀伊国に幸せる時の歌十三首」中に収められた一首であり、行幸の際に詠まれたものであることは明らかである。そこから三十年ほど時代が下ると、天平六（七三四）年聖武天皇の難波宮行幸で山部赤人が詠んだ、

（オ）ますらはみ狩に立たし娘子らは赤裳裾引く清き浜

（カ）世の中のすべなきものは年月は流るるごとし（中

略）娘子らが娘子さびすと韓玉を手本に巻かし

（或はこの句あり、云はく、「白たへの袖振り交し

紅の赤裳裾引き」）よち子らと手携はりて遊びけ

む時の盛りを留みかね過ぐし遣りつれ蜷の腸

か黒き髪にいつの間か霜の降りけむ紅の（一）に云

ふ、「丹のほなす」）面の上にいつくゆか皺が来り

し（一）に云ふ、「常なりし笑まひ眉引き咲く花のう

つろひにけり世間はかくのみならし」（後略）

（巻五 八〇四）

「紅の赤裳」は「白妙の袖」と共に、当該歌の異伝として記されている。袖の「白」に対する「赤裳」であって、漢詩文的な色彩対比を利用した表現であるが、後の波線部「紅の（一）に云ふ「丹のほなす」）面の上に」と併せて考えると、憶良が「赤」「紅」「丹」といった赤系統の色彩を、若き娘子を象徴するものと捉えていたことが窺える。

次に旅人・虫麿の例を見てみたい。

（キ）松浦川川の瀬速み紅の裳の裾濡れて鮎か釣るらむ

（巻五 八六一 旅人）

（ク）しなでる片足羽川のさ丹塗りの大橋の上ゆ紅の

辺を

（巻六 一〇〇一）

が確認できる。行幸歌に、このような類例が確認できることから、女官の「裳」を詠むことは、一つのステレオタイプな表現として確立されており、それが受け継がれているのだということが推察される。

また、それとは別の視点で（ア）（オ）の歌を見てみると、「赤裳」というものは女性を「傍観」、または「空想」する折に、真つ先に目に付く（心に浮かぶ）ものなのだということが看取できる。これと同じことは、真木柱巻の引歌、及び『古今六帖』に採録された作者未詳歌、

山吹のにはへるいもがはねず色の赤裳の姿夢に見えつつ

（巻十一 二七八六）

にも言える。すなわち、目の前に相対している時ではなく、時空を隔てた手の届かない場所にある時にこそ、より一層女性の鮮やかな「赤裳」が、目を、心を捉えるのである。

## II. 憶良・旅人・虫麻呂の「赤裳」

次に、憶良、旅人、虫麻呂の歌を見てゆく。まず憶良の「赤裳」は、その代表作の一つである「哀世間難住歌」の中に確認できる。

赤裳裾引き山藍もち摺れる衣着てただひとりい  
渡らす児は若草の夫があるらむ櫛の実のひとり  
か寝らむ問はまくの欲しき我妹が家の知らなく

（巻九 一七四二 虫麿）

（キ）は、いわゆる松浦河歌群における、「後の人の追和する詩三首」中の一首である。松浦河歌群は、「余、暫に松浦の県に往きて逍遙し、聊かに玉島の潭に臨みて遊覧するに、忽ちに魚を釣る女子等に値ひぬ」と序が語るように、松浦河の辺で仙女に出会った男が、彼女たちと歌を贈答するというものであり、その成立には「遊仙窟」の強い影響があると考えられている（注⑦）。そして、（キ）の「紅の赤裳」は、「遊仙窟」に登場する仙女・十娘の衣裳が「裙裾石榴色」と表現された箇所由来するとの指摘がある。

松浦河歌群中、他に「蓬客の更贈る歌三首」中にも、

松浦川川の瀬光鮎釣ると立たせる妹が裳の裾濡れぬ

（巻五 八五五）

と、娘子たちの裳を詠んだものもあるが、ここでは裳の色は記されていない。この歌と（キ）の差は、（キ）が後人の追和の形をとり、実際に仙女を目にしている者が、その姿を思い浮かべて詠ったとされることである。それは、前掲した（ア）（オ）、

及び二首の作者未詳歌がそうであつたように、「赤裳」が相対していない女性を思い描く際の象徴だという点で共通性があるだろう。しかしその対象が、現実世界に存在する女性から、異界の仙女へ移行している点については、次の(ク)との関係から注目しておきたい。

(ク)は、「河内の大橋を独り去く娘子を見る歌一首」と題された高橋虫麻呂の作である。この橋を渡り行く娘子もまた、橋姫を思わせる遊女・巫女的な、異界性を孕んだ存在だと指摘される(注⑧)。

憶良の「紅の赤裳」は、時空を隔てた女性の美を象徴するという意味で、人麻呂や赤人の「赤裳」に通じる。また、旅人・虫麿の詠んだストーリー性を有する歌の中では、「赤裳」の女性は情交の対象として描かれるものの、そこに異界性が備わることで、男性との距離感は更に広がっている。

### Ⅲ・家持・池主の「赤裳」

次に、家持・池主の「紅の赤裳」表現を挙げる。

(ケ)大君の仕けのまにまにしなざかる越を治めに出でて来しますら我すら(中略)娘子らが春菜摘ますと紅の赤裳の裾の春雨ににはひひづちて通

かな都のイメージだったのだろう。

### 玉鬘の「赤裳」が内包するもの

以上のように、「赤裳の娘子」の姿は、万葉第二期から第四期の歌人に至るまで詠み継がれた。そして、詠みぶりや女性の位置づけは変化しているものの、「赤裳」によって表現される女性が共通して有する性質は、それを見つめる(空想する)男性に対する遠距離感・不可侵性ともいえるべきものであろう。人麻呂や赤人は、女官達を「傍観」の対象として詠み、憶良は、二度と戻れない若き日の美を「紅・赤・丹」という色彩に託し、旅人・虫麻呂は、虚構の中の異界の女性を「赤裳」によって印象的に表現した。そして、家持・池主の贈答における「紅の赤裳の娘子」は、越中にあり、病ゆえに宴にすら参加することができない家持の心中で、望郷のシンボルとして輝くのである。

ここまで『万葉集』の「赤裳」歌を通覧して看取された、男性との遠距離感・不可侵性は、冷泉帝に対する玉鬘にも備わっている。すなわち、既に人妻となった玉鬘は、冷泉帝にとってもはや傍観の対象でしかあり得ない。しかも、この歌を口ずさむのが玉鬘と別れた後、その美貌を想い起してという状況も、

ふらむ時の盛りをいたづらに過ぐし遣りつれ(後略) (巻十七 三九六九 家持)

(コ)大君の命恐み あしひきの山野障らず天離る鄙も治むるますらをやなにか物思ふ(中略)春の野にすみれを摘むと白たへの袖折り返し紅の赤裳裾引き娘子らは思ひ乱れて君待つとうら恋すなり心ぐしいざ見に行かなことはたなゆひ (巻十七 三九七三 池主)

(ケ)を詠んだ家持は、赴任先の越中において、病の床にあった。歌中の娘子たちの背景に広がるのは、家持が想いを馳せる都の風景であろう。彼女たちが纏う「紅の赤裳」もまた、うら若い娘子の美を象徴するものとして詠まれている。しかし、この時の家持にとって都の娘子達は、人麻呂が詠んだ「傍観」する女官、また旅人や虫麻呂が虚構の中に描いた仙女たちと同様に、物理的・心理的距離感のある存在だということには違いない。

家持がさかんに「くれなゐ」を詠んだのが、天平十九年から勝宝二年までの三年間、つまり越中にあつた時代に限られていることは、中西進氏によって指摘されている(注⑨)。中西氏の論じられる通り、「紅」という色そのものが、家持にとって鮮や

時空を隔てた女性を思い起こす際、映像として浮かぶ「赤裳」の在り方として、万葉のそれに通じている。

冒頭近くに記した通り、ここで、「紅の赤裳」歌を引く真木柱巻の一場面に、『万葉集』からの直接的な影響があると論じるつもりはない。しかし少なくとも、万葉人が詠んだ「赤裳」が、玉鬘に関連する引歌と一定のイメージを共有していることは指摘できるだろう。そこに、「赤裳」という語の内包していたイメージが、平安中期においても残存しており、それを間接的に『源氏』が汲み取ったと考えるのは、穿ちすぎであろうか。

また、前述した通り、万葉の「赤裳」のイメージが、「遊仙窟」等に由来する仙女像や、虫麿の「大橋の上をゆく娘子」のように、遊女・巫女的な要素をも包含していることにも注目したい。

玉鬘の母・夕顔に、遊女・巫女的な性質が認められることは、既に原岡文子氏による詳論がある(注⑩)。すなわち「赤裳」歌の登用は、あるいは夕顔が有していた性質として、前述した妖狐像のみならず、巫女や仙女といった異界の者的な要素など、さらに多義的な意味を含んで玉鬘に引き継がせるメタファーだった可能性も考えられる。この点については、夕顔の象徴色である「白」との関連性も考慮しながら、引き続き考察を重ねてゆきたい(注⑪)。

資料出典

・『源氏物語』『万葉集』は小学館 新編日本文学全集に、『古今和歌六帖』は国歌大観CD-ROMによるが、一部表記を改めた。

注

注① 当歌は『万葉集』巻十一・二五五〇番歌「立ちて思ひ居てもそ思ふ紅の赤裳裾引きにし姿を」が『古今六帖』に採録されたものであるが、傍線部の「裾引き」が、真木柱巻では、『古今六帖』と同じ「垂れ引き」となっている。『万葉集』古写本間では、「裾引き」の箇所には大きな異同が見られないため、おそらく『源氏』は『古今六帖』に拠ったのだらうと考えられている。

注② 齋藤由紀子氏「源氏物語真木柱巻における「赤裳垂れ引きにし姿を」の引歌について」『瞿麦』十五号二〇〇二年十一月

注③ 新聞一美氏「もう一人の夕顔―帚木三帖と任氏の物語」『論集中古文学5 源氏物語の人物と構造』所収 笠間書院一九八二年、「日中妖狐譚と源氏物語夕顔―任氏行逸文に関連して―」『甲南大学紀要(文学編)』七十二号一九八九年三月

注④ 齋藤氏の注③の論に関して、「赤裳」が夕顔の「狐の影」を引き継がせる装置として働くという点は首肯できる。

しかし氏が、「赤裳垂れ引き」と、『万葉集』古写本には見られない『古今六帖』本文を引く点について、竹取のかぐや姫の昇天を暗喩するものと結論づけられたのは、即座に納得し難く、尚検討したい。また、引き継がれる「狐の像」が、夕顔では白き装束の「白」、玉鬘では赤裳の「赤」によって示唆されることについては、『源氏物語』の人物造型における色彩への拘りという視点から、指摘を加えておきたい。玉鬘という人物を特徴づける色彩として充てられたのは、母とは異なり、艶やかな赤や黄であった。例えば、かの玉鬘巻における正月の衣配りで玉鬘に贈られたのは「曇りなく赤きに、山吹の花の細長」であり、この装束を見て紫上は「内大臣の、はなやかにあなきよげとは見えながら、なまめかしう見えたる方のまじらぬに似たるなめり」と感じていた。また野分巻においては、夕霧の目を通して、「八重山吹の咲き乱れたる盛りに、露のかかれる夕映へぞ、ふと思ひ出でらるる」と、「山吹」の黄、「夕映え」の赤に、その美を喩えられている。おそらく、このように描かれてきた玉鬘の象徴

注⑧ 斎藤安輝氏「橋を渡る女―見河内大橋独去娘子―歌」小考『日本文芸研究』四三―一四号、一九九一年四月

注⑨ 中西進氏「くれなゐ―家持の幻覚」『中西進 万葉集論 集第五巻』講談社 一九九六年所収

注⑩ 原岡文子氏は「遊女・巫女・夕顔―夕顔巻をめぐる―」『共立女子短期大学文学科紀要』三十二号 一九八八年二年)、鈴木日出男氏が「和歌の対人性―求婚の歌と物語」『国語と国文学』六〇―五号 一九八三年五月)、夕顔の発した「海人の子なれば」という言葉が引歌とする、

白波の寄する渚に世をつくす海人の子なれば宿も定めず (新古今和歌集 一七〇一番)

が、『和漢朗詠集』では「遊女」の項に収められていることから、夕顔を「神女か遊女」と定義されたのを受け、夕顔の遊女性・巫女性を考察されている。

注⑪ 夕顔の異界性と、そのイメージカラーである「白」との関連性については、二〇〇八年四月発行の『日本女子大学大学院紀要』にて、明石君・浮舟の「白」の背景と共に論じる予定である。

注⑦ この点については多くの論が呈され、ほぼ定説化しているが、代表的なものとしては、小島憲之氏「遊仙窟の投げた影」(『上代日本文学与中国文学』中「塙書房一九六四年所収」、土屋文明氏『萬葉集私注』の当該歌注、古沢未知男氏『遊於松浦河』と『遊仙窟』並びに『洛神・高唐賦』(『漢詩文引用より見た万葉集の研究』桜楓社一九六四年所収)等が挙げられる。